

東インド文学とインドネシア民族主義 —植民地支配者と異なるヨーロッパ人との出会い

弘末 雅士

はじめに

交通手段の発達により、19世紀後半から東インド（インドネシア）へ赴くオランダ人が増える。彼らがこの地域への関心を高めるなかで、東インド文学と呼ばれる作品群が登場する。オランダ語で書かれた東インドを舞台とする小説であるが、オランダ人だけでなく現地の有識者の間にも読者を得た。

オランダの植民地支配は、1830-70年に東インドに導入した強制裁培制度により深化した。この制度は、オランダが住民に指定した作物の栽培と生産量を、提示した価格で搬出させるものである。サトウキビや藍、コーヒー、タバコ、茶などの栽培がその対象となった。ジャワ人の約8割が制度に関わったとされる。その後この制度が廃止されると、プランテーション企業や鉱山企業が、広域に参入し始める。それまでジャワやモルッカ諸島などを拠点にしたオランダ植民地支配が、スマトラ、カリマンタン、バリ、スラウェシ、東部インドネシアの全域に拡大する。

植民地支配の拡大は、様々な影響をインドネシア社会に及ぼした。東インドでは、首都を中心とする官僚制度と学校制度が広く張り巡らされた。またヨーロッパからの来航者の増加は、現地人とヨーロッパ人が交流する機会を増やした。オランダの影響力が強まり、在地の権力者の権威が後退していくなかで、地域の文化

や伝統は衰退を余儀なくされた。そうした状況に不満を有した者もいた。しかし、彼らも植民地権力の優位は否定できなかった。

他方、東インド文学のなかには、ヨーロッパの文明や価値観の優越を説くだけでなく、少数ながら東インドの文化や信仰の意義を訴えた作品も存在した。現地人有識者のうちには、こうした作品に触発された者も少なくなかった。

少女期にオランダ語教育を受け、ジャワの文

化や慣習に複雑な思いを抱いていたジャワ人の貴族の娘カルティニ(1879~1904年)も、その一人である(図1)。しかし、彼女は東インド文学に触れるなかで、ジャワ文化に誇りを見出すに至ったことを、近年富永泰代氏が明らかにしている(富永 2019)。富永氏は、カルティニがヨ



(図1) カルティニ

ーロッパとジャワのボーダーを無くす姿勢を貫き、ジェンダー・年齢・身分・人種・文化を超えた新たな地平を切り開くことを、オランダ体制下で希求したことを指摘する。

一方、本稿ではこうした外来者やその思想が現地人と触れ合う状況が、民族意識も台頭させ

ることをみていく。その際、植民地支配者と異なるタイプのヨーロッパ人が説く被植民者との共存や連帯の理念が、現地人有識者に植民地支配への対抗原理を構築させたことを検討する。東南アジアの民族主義運動において、植民地宗主国と現地の言語や価値観を橋渡しする現地人有識者の重要性が、従来から指摘されてきた（アンダーソン 1997: 191-197）。これに対し、ここでは彼らに影響を与えたヨーロッパ人に着目して、この問題を考えてみる。

東インド文学とカルティニ

東インド文学が対象とした読者は、第一にオランダ人である。強制裁培制度下で作物の栽培と供出を託されたジャワ人首長が住民を酷使し、それに見て見ぬ振りをするオランダ人官吏を告発した『マックス・ハーフェラル』(Multatuli, *Max Havelaar*, Amsterdam, 1860; [ムルタトゥーリ 2003]) は、近代東インド文学の始まりとされる。筆者エドワード・ダウウェス・デッケル（ペンネーム：ムルタトゥーリ）は、西ジャワのルバック県の元オランダ人副理事官だった。彼は、上記の状況を東インド総督に訴えたが、総督は耳を貸さなかった。しかし彼の主張は、オランダで台頭しつつあったこの制度に反対する自由主義者に、少なからぬ影響を与えた。彼らの影響力を無視できなくなったオランダは、1870年に強制裁培制度を廃止した。またこの作品のジャワ人農民への眼差しを、のちにインドネシア人有識者も高く評価した。

オランダが東インド社会に深く関与し始めると、インドネシア人の価値観からみたヨーロッパ人のあり方も文学のテーマとなってくる。

1900年に出版されたクーペルス（図2）の『沈黙の力』(L. Couperus, *De Stille Kracht*, Amsterdam, 1900; [Couperus 1990]) は、その代



(図2) ルイス・クーペルス

表である。この小説は、東部ジャワの理事官を務めるオランダ人のエリート官僚ファン・アウデイクと、その妻レオニの周辺に起こった出来事の物語である。アウデイクは、役務に忠実なオランダ人理事官であった。彼は、配下

のジャワ人県長が職務に怠慢であるとみなし、彼を罷免する。また妻のレオニは、自らの美貌を武器に、夫以外の男性とも関係を持つ、東インド生まれのヨーロッパ人であった。そんななかレオニが水浴中に、謎の赤い斑点の物体が体に付着したり、家に石の雨が降ったりする不思議な出来事が起こり始める。アウデイクは軍隊まで動員して、それに対抗しようとするが、効果がなかった。アウデイクはこの出来事後、ヨーロッパ人の優越性が信じられなくなり、理事官をやめ、妻とも別れ、ジャワ人女性と暮らす道を選ぶ。ジャワ人は、目に見えない

力の存在を信じており、そうした力の前に、アウデエイク一家が屈する物語である。

クーペルスのこの小説を、カルティニは1901年のクリスマス・プレゼントとしてオランダ人の文通相手より贈られ、その内容に強い感銘を受けた。またオランダ人女流作家のド・ヴィッツの『デサの中のオルフェウス』(Wit1902)も、彼女は愛読した。それは、ジャワにやってきたオランダ人青年技師ウィレムが、横笛を吹くジャワ人のシ・ブンコルと出会い、デサ(村)の生活を聞くうちに、富を求めてやって来た自らを省み、カネが支配する物質主義の世界から決別することを描いた作品であった。この本は1902年に出版されたが、カルティニは、それ以前にオランダの雑誌に掲載されたこの作品を読んでいた(富永 1991: 46)。

こうしたなかで、カルティニのジャワ文化観も変容していく。これらの作品に出会う直前の1901年8月のカルティニがオランダ人の文通相手に送った手紙は、以下のように語る(土屋 1991: 136-137; Abendanon 1912: 106)。

花の薫りと香の匂いをかぐたびにごとに、それはわたしを思い出の世界、心に触れる世界へ導いてゆきます。それは過ぎ去った日々を思い出させ、わたしの身体に流れているジャワ人の血潮を強く感じさせます。ああ、わが民族の魂、その起源においてかくも美しく、気高く、詩的で、謙虚で、寛大であったその魂—あなたはいまだここに行ってしまったのですか。過ぎゆく時と日常の繰り返しがあなたに何をもたらしてしまったのですか。

ヨーロッパ式教育を受けたカルティニには、ジャワ人の魂が意義を失いつつあるものを感じられていた。

ところが、『沈黙の力』や『デサの中のオルフェウス』に出会ったあとの1902年8月のアベンダノン夫妻への手紙は、カルティニの心境の変化をうかがわせる。彼女は民衆の民話や伝説に関心を寄せている(富永 2019: 120; Jaquet 1987: 366)。

我々は民衆の口から発せられる美しい言葉を聞き取り、全てを文字にする作業を行っているところです。「詩」という言葉はジャワ語にはなく、我々は「花の言葉」と言いますが、言い得て妙でしょう。我々は今唄を習っています。祝祭の唄ではありません。ジャワ人が唄うところをお聞きになったことがおありでしょうか。

またカルティニは、ジャワ人の職人の作り出す工芸品を絶賛する(富永 2019: 210; Abendanon 1912: 231-232)。

素朴なジャワ人の能力への真の崇高さと驚嘆です。立派な作品を目にし、次に素朴な作り手と簡素な道具を見て、職人がそれを用いて立派な作品を作り出すところを見れば、作品に対する敬意そして彼らが真の芸術家であることを確信するのです。

彼女のなかで、ジャワ人民衆の文化や庶民の工芸作品が、オランダ人に対して誇れるものになったのである。

欧亜混血者と原住民

東インド文学とともに、原住民有識者に少なからぬ影響を与えたのが、東インドのヨーロッ

パ系住民やオランダ人社会主義者たちである。歴史的に 19 世紀後半になるまで東インドでは、欧亜混血者や現地生まれのヨーロッパ人が現地社会とヨーロッパ本国の間を仲介してきた。

1854 年の東インド統治法で住民は、ヨーロッパ人、外来東洋人（華人やアラブ人など）、原住民の三つの法的範疇に分けられた。ヨーロッパ人の父親に認知された欧亜混血者は、ヨーロッパ人の法的地位を有した。しかし、19 世紀後半以降ヨーロッパ本国からの来航者が増えるなかで、教育が乏しい欧亜混血者は、彼らに職を奪われ始めた。またヨーロッパにおける白人の優越性を唱える人種主義の台頭は、欧亜混血者や東インド生まれのヨーロッパ人を社会的に周縁化させた。

こうしたなかで、1880 年代より東インドのヨーロッパ系住民は、一時滞在のヨーロッパ出身者が東インドの富を搾取して帰ることを非難し、相互扶助団体を結成し始める。その一つが、1898 年に東インドのヨーロッパ人住民の物心両面の援助を謳い、バタヴィアで結成された東インド同盟である。同盟は機関誌を発行し、同盟の店を設立し、小農業を促進し、教育を促進するなど、新しい生活手段の開発を目指した。会員は 1900 年に 4500 人を数え、ほとんどが欧亜混血者であった（ブルンベルヘル 1939: 66-67）。

さらにより下層のヨーロッパ系住民の窮状を訴えるために、東インド生まれのヨーロッパ人およびヨーロッパ人住民のうち永住者の利益の促進を目的としたインスリンデが、プランテーション企業の参入で新来のヨーロッパ人が増えたバンドゥンで 1907 年に設立された。インスリ

ンデは、植民地体制下で教育を受けたジャワ人有識者とも交流し、1911 年には結社の目的を、オランダ領東インドの繁栄と福祉のために物心両面の利益を促進し、この目的の妨げとなっているすべての不当な状態や法令を破棄することに努めると改定した。また少なからぬヨーロッパ系住民が就業していた公営事業の職員の間から、労働組合も組織され始めた。1908 年に中部ジャワ北岸のスマランに鉄道組合が生まれ、原住民メンバーも参加が認められた(Bosma and Raben 2008: 307-308)。

そして 1912 年には、東インド同盟とインスリンデを統合するために、欧亜混血者のダウウェス・デッケルとジャワ人のチプト・マングンクスモ、スワルディ・スルヤニングラットが中心になり、東インドを祖国とみなす「東インド人」による国家作りを目指す東インド党が、バンドゥンで創設された（図 3）。この「東インド人」には、原住民であろうが、ヨーロッパ人であろうが、外来東洋人であろうが、東インドを祖国とみなす人なら、誰でもなれるとされた。リーダーの一人ダウウェス・デッケルは、『マックス・ハーフェラール』の著者エドワード・ダウウェス・デッケルの甥で、父親がオランダ人、母親がヨーロッパ人とシャム人を両親にもつ、欧亜混血者であった。彼は、ブール戦争（1898～1902 年）にオランダ系住民を支援するために参加した。戦後彼はジャーナリストとなり、東インドでのオランダ本国出身者の横柄さを批判した。

東インド党は、欧亜混血者を中心に 7000 名ほどのメンバーを獲得したが、そのなかに原住民も 1500 人含まれた。この東インド党の活動に影

響を与えたのが、神智学の思想であった。1875年にブラヴァツキーとオルコットが創始した神智学協会は、全人類の友愛を説き、諸宗教や哲学の比較と統合を意図し、降霊術の研究を主な目的とした。アメリカで設立されたこの協会は、その後インドに拠点を移し、85年以降ロンドンに本部を構えた。イギリスではフェビアン協会のアニー・ベザントらが熱心な信奉者となり、オランダでは社会民主主義労働党員の間に支持者を得た。神智学は、オランダ人をとおして東インドにもたらされ、人種的差異を超えて人類が兄弟であるとする理念が、有識者にアピールした。東インド党のリーダーのチプトとスワルディは、その熱心な信奉者であった(永積 1980: 84-90; Bosma and Raben 2008: 322)。

また原住民のうちからも、社会変革運動が生じた。1908年原住民医師養成学校の学生達を中心となり、原住民の調和ある発展をかけた西欧教育の普及とジャワ文化の探求を目指して、ブディ・ウトモが設立された。チプトとスワルディは、もともとブディ・ウトモのメンバーであった。人類が同一起源であるのに、なぜ現実には諸民族の優劣が存在するのか、疑問に感じていたブディ・ウトモのメンバーは、教育の普及と民族意識の覚醒度にその違いがあるとする、東インドの神智学協会会長のオランダ人ラッベルトンの主張に耳を傾けた(Labberton 1909)。

さらに1911年末、辛亥革命の成功に高揚する華人系住民に対抗して、原住民ムスリムの物心両面の発展をかねて、相互扶助を唱えるイスラム同盟が中部ジャワのスラカルタに設立され

た。イスラム同盟は、華人への反発に加え、ムラピ山の噴火や疫病の流行、米価の高騰などの社会不安を背景に、またたく間にジャワ島各地に広がった。1913年半ばまでに会員30万人を獲得し、ジャワ以外の島々にも各地に支部が設けられた。イスラム同盟の発展とともに、原住民の発行する新聞の数が、欧亜混血者や華人のものを凌駕し、原住民意識が東インド住民の間で、広く共有され始めた(Adam 1995: 171-177)。

こうした状況下、東インド党はイスラム同盟への接近をはかった。チプトとスワルディは、原住民委員会を結成し、デッケルの思想をマレー語で広めようとした(深見 1996)。しかし同党は、オランダより植民地秩序を乱すものとみなされ、1913年9月に上記の3名のリーダーが国外追放処分を受けた。党は瓦解した。



(図3) 追放されオランダにやってきた東インド党のリーダーのチプト、デッケル、スワルディ (写真下段の左から)

インドネシア民族主義運動とヨーロッパ系住民の後退

その頃オランダ人スネーフリートが、中部ジャワのスマランで1914年東インド社会民主主義

協会を組織し、鉄道の労働組合運動の指導に乗り出した。熱心な社会主義者であった彼は、東インドで社会主義運動を広め、東インド党の欧亜混血者を吸収することを試みた。東インド党员だった欧亜混血者も、当初この協会の活動に関わった。またスネーフリートは、イスラム同盟の原住民会員にも働きかけ、同盟員のうちに支持者を得た(McVey 1965: 13-23)。

当時の東インドのムスリムには、社会主義とイスラムが矛盾せず、社会主義を 20 世紀のイスラムの教えを反映したものともみなす者が、少なくなかった(ハッタ 1993: 95-96)。スマランのムスリム社会主義者を抱えたイスラム同盟は、勢力を拡大した。また 1917 年のロシア革命による社会主義政権の誕生は、社会主義者を活性化させた。増大する社会主義者に呼応して同盟議長のチョクロアミノートは、「罪深い資本主義」への対決を打ち出した。

高揚する社会主義者達は 1917 年の終わりに、植民地軍の兵士や水夫たちにソヴィエト樹立を働きかけ、紅衛兵運動を展開した。これに対し、オランダは運動に介入した。スネーフリートをはじめオランダ人社会主義者たちの多くを、国外追放にした。その結果運動の主導権は、原住民の手に移った。彼らは 1920 年、現地語の名称を掲げた東インド共産主義者同盟を結成した。アジアで最初の共産党であった(McVey 1965: 34-47)。

他方、先の東インド党のリーダーであったデッケル、チプト、スワルディは、帰国が許されていた。彼らは 1918 年よりインスリンデを基盤に活動を再開し、原住民の支持者を増やした。1919 年彼らは、インスリンデをサレカット・ヒ

ンディア(国民東インド党)と改名し、東インド居住者のすべてが会員になれば、祖国東インドの福祉と繁栄を促進し、祖国の独立に向け努力することを唱えた(ブルンベルヘル 1939: 72)。以前の東インド党とほぼ同じ主張であった。

しかし、欧亜混血者は、もはや原住民と他の民族集団との紐帯役を志向しなかった。東インドの公職に就く原住民が増加するなかで、欧亜混血者は彼らに職を奪われる危機感を強く持ちだした。ヨーロッパ人の法的地位を持つ彼らは、オランダが 1918 年に導入した、ヨーロッパ人、原住民、外来東洋人の代表より構成される植民地議会(フォルクスラート)に代表を送り、オランダ体制下で彼らの地位を向上させる方策を採り始めた。神智学協会会長ラッベルトンも、この植民地議会の議員に選ばれた。彼はオランダ体制下で東インドの自治を標榜した(Bosma and Raben 2008: 329, 335)。

多くの原住民運動家も、自治の先に独立を目指せるこの構想に当初賛同した。オランダも、1901 年より原住民の福祉向上、東インドの自治と地方分権の促進を謳う倫理政策を掲げており、東インドへの権限委譲に前向きであった。しかし、イスラム同盟の地方支部の反乱や本国政府の保守化により、オランダは 1921 年以降それに消極的になった。植民地政庁の対応やヨーロッパ系住民の運動からの後退に対し、原住民運動家たちは、オランダへの非協力の姿勢を強めた。

東インド共産主義者同盟は、その後サレカット・ヒンディアの多くのメンバーも吸収した(Shiraishi 1990: 165-215, 273)。同盟は、主導権争いから二重党籍を禁じたイスラム同盟と 1923 年

に袂を分かち、翌年インドネシア共産党に改名した。共産党は、反帝国主義を掲げてインドネシアの独立を唱えた。同党は支持者を有識者や労働組合員だけでなく、乱れた世の中を改める正義王を待望する伝統的信仰を有するジャワ人農民からも獲得した。党員を増やした共産党は、1926年末～27年初めに中部ジャワ、西ジャワ、西スマトラの各地で武装蜂起した。しかし、オランダは蜂起に素早く対処し、共産党の反乱を弾圧した。1万3千人の逮捕者を出し、共産党は瓦解した。



(図4) 1925年のバタヴィアでのインドネシア共産党の幹部会

民族主義運動はこのち、のちにインドネシア共和国初代大統領となるスカルノが、インドネシア国民同盟を1927年組織し、大衆運動によりインドネシアの独立を達成することを唱えた。翌28年インドネシア国民党に改称されたこ

の党で、正規の党員になれるのはインドネシア人（東インドの原住民）に限られた。

まとめと展望

ヨーロッパ人や欧亜混血者と連携して始まった東インドの民族主義運動は、オランダの弾圧や欧亜混血者の離脱により、原住民が主体となった。後から見ると、原住民色が強まるインドネシア民族主義運動であるが、出発点で運動と関係したヨーロッパ人は、重要な役割を担った。彼らの説いた人類の根源的同一性や人種や

出身地を超えた祖国意識、さらに階級闘争は、民族意識を形成させる契機となった。

本稿が見てきた事例は、国民的同一性を志向するあまり、国家の垣根が高くなり、異なるエスニシティや宗教間の確執が表面化している今日、状況を打開するためのヒントを提供してくれる。「変わった外来者」が登場し、国籍やエスニシティ、宗教を超えて人々に受け入れられる時、人間集団をめぐる新たな観念が生まれる可能性がある

る。人の出会いは、興味深い。偶然の交流が、流動的な状況下では、新たな関係を創出させる（弘末2014:138-158）。そうした活動が、媒体にも支えられ拡大していくと、既存の枠組み変容し始める。

参考文献

Abendanon, J. H. ed., 1912, *Door Duisternis tot Licht: Gedachten van Raden Adjeng Kartini*, N.

V. Electriscbe Drukkerij “Luctor et Emergo”, The Hague.

- Adam, A. B., 1995, *The Vernacular Press and the Emergence of Modern Indonesian Consciousness (1855-1913)*, Cornell University, Ithaca (New York).
- ベネディクト・アンダーソン、1997『増補想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』（白石さや・白石隆訳）、NTT 出版。
- ペテロス・ブルンベルヘル、1939『オランダ領東インドにおける印欧人の運動』（深見純生訳）、桃山学院大学『総合研究所紀要』第 22 巻第 1 号（1996 年 9 月）。
- Blumberger, J. Th. P., 1987, *De Nationalistische Beweging in Nederlmsdch-Indië*, Foris Publications, Dordrecht and Providence.
- Bosma, U. and Raben, R., 2008, *Being "Dutch" in the Indies: A History of Creolisation and Empire, 1500-1920*, Ohio University Press, Athens.
- Couperus, L., 1900, *De Stille Kracht*, L. J. van Veen, Amsterdam.
- Couperus, L., 1924, *Eastward*, trans. by J. Menzies-Wilson and C. C. Crispin, Hurst & Blackett, LTD. Paternoster House, E. C., London.
- Couperus, L., 1990, *The Hidden Force*, trans. by Alexander Teixeira de Mattos and revised and edited by E. M. Beekman, University of Massachusetts Press, Amherst.
- 深見純生、1996「1913 年のインドネシア—東インド党指導者国外追放の社会的背景—」『東南アジア研究』34 巻 1 号。
- モハマッド・ハッタ、1993『回想録』（大谷正彦訳）、めこん。
- 弘末雅士、2014『人喰いの社会史—カニバリズムの語りと異文化共存—』山川出版社。
- Jaquet, F. G. P. ed., 1987, *Kartini Brieven aan Mevrouw R. M. Abendanon-Mandri en haar echtgenoot met andere documenten*, Foris Publications, Dordrecht and Providence.
- Labberton, D. van Hinloopen, 1909, *Theosophie in verband met Boedi-Oetomo*, Kho Tjeng Bie, Batavia.
- McVey, R. T., 1965, *The Rise of Indonesian Communism*, Cornell University Press, Ithaca, New York.
- Multatuli, 1860, *Max Havelaar, Of de Koffij Veilingen der Nederlansche Handelmaatschapij*, J. de Ruyter, Amsterdam.
- ムルタトゥーリ、2003『マックス・ハーフェラーもしくはオランダ商事会社のコーヒー競売』（佐藤弘幸訳・森山幹弘協力）、めこん。
- 永積昭、1980『インドネシア民族意識の形成』東京大学出版会。
- Shiraishi, T., 1990, *An Age in Motion: Popular Radicalism in Java, 1912-1926*, Cornell University Press, Ithaca and London.
- 富永泰代、1991「カルティニの「世界認識」の形成過程—カルティニの読書体験についての一考察—」『南方文化』第 18 号。
- 富永泰代、2019『小さな学校—カルティニによるオランダ語書簡集研究—』京都大学学術出版会。
- 土屋健治、1991『カルティニの風景』めこん。
- Wit, A. de, 1902, *Orpheus in de Dessa*, P. N. van Kampen & Zoon, Amsterdam.